

吉田向井・千本原

—昭和63年度県単高速道関連道路改良工事
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—

1989

塩尻市教育委員会

よし だ むか い せん ほん ばら
吉田向井・千本原

— 昭和63年度県単高速道関連道路改良工事
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 —

1989

塩尻市教育委員会

序

昭和63年3月の塩尻市内を縦貫する中央道長野線の開通に伴い、市内道路網に関わる諸事業が、一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事をはじめとして、県道、市道に至るまで行なわれています。この中で中央道長野線の側道については現在、公団分について開通しているところですが、この度、西側の側道に関するして広丘吉田から広丘高出の区間、県営事業として拡幅工事が行なわれることになりました。ここには県営田川地区圃場整備事業と中央道長野線建設事業の際、発掘調査された3地区3遺跡がかかっていますが、内1ヶ所についてはすでに消滅しているため、残る広丘吉田の吉田向井遺跡と広丘高出の千本原遺跡について事業主体である長野県松本建設事務所と協議を重ね、工事施工前に緊急発掘調査を実施して記録保存をはかることにしました。

発掘調査は7月末から9月上旬の酷暑炎天下の元という極めて過酷な条件下において実施されましたが、おかげさまで作業も順調に進み、多くの資料が得られ、遺跡の性格は勿論、塩尻市の古代の様相を捉えていく上で大きな成果を上げることになりました。

終わりにあたり、本調査に御理解、御協力を下さいました地元関係者の方々や献身的に作業に御協力いただいた発掘調査参加者の方々など関係各位に深甚の謝意を表するものであります。

平成元年2月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優一

例　　言

1. 本書は、昭和63年度県単高速道関連道路改良工事に伴う、塩尻市広丘地区の吉田向井遺跡と千本原遺跡の発掘調査報告書である。なお吉田向井遺跡については過去に2度、県営田川地区圃場整備事業と中央自動車道長野線建設事業に関連して発掘調査が実施されており、「1983 吉田向井 塩尻市教育委員会」、「1988 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘報告書2 助長野県埋蔵文化財センター」が発行されている。

2. 調査経費については全額、長野県松本建設事務所からの委託金による。

3. 発掘調査は、吉田向井・千本原遺跡発掘調査団（団長 中島章二氏）に委託し、現場での調査は昭和63年7月30日から9月8日まで行なった。

4. 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和63年9月から平成元年2月にかけて行なった。分担は次のとおりである。

遺構…整理、トレース、図版：鳥羽。

遺物…実測、トレース、図版：小林。

写真…鳥羽。

5. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第I章、第II章、第III章第1節1・3・4遺構、第2節……鳥羽嘉彦

第III章第1節2・4遺物・5、第IV章……………小林康男

6. 本書の編集は鳥羽が行なった。

7. 中・近世の遺物については原 明芳、野村一寿各氏の御指導を得た。銘記して感謝申し上げたい。

8. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序

例 言

第Ⅰ章 調査状況	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	2
第4節 遺跡の状況と面積	4
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境	6
第1節 自然環境	6
第2節 周辺遺跡	6
第Ⅲ章 調査遺跡	9
第1節 吉田向井遺跡	9
1 位置	9
2 過去の調査経過	9
3 調査概要	11
4 造構・遺物	13
1) 住居址	13
2) 土塙	20
3) 建物址	23
4) 竪穴状造構	24
5) 造構外出土遺物	25
5 まとめ	27
第2節 千本原遺跡	28
1 位置	28
2 調査概要	28
3 まとめ	28
第Ⅳ章 結語	31

第一章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

昭和63年3月に塩尻市内を中央道長野線が開通するに伴い、市内道路網に係わる諸事業が、一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事をはじめとして、県道・市道に至るまで行なわれている。こうした状況の中で、現在ある中央道側道の拡幅工事が県事業として行なわれることとなり、対象となる広丘吉田から広丘高出までの用地内にある埋蔵文化財包蔵地3遺跡が一部かかることになった。このため塩尻市教育委員会は長野県教育委員会と事業主体である松本建設事務所と協議を重ね、すでに圃場整備が実施され消滅している高田遺跡を除いた吉田向井遺跡と千本原遺跡について、工事施行前に緊急発掘調査を実施して記録保存をはかるとした。

昭和63年6月2日 埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について松本建設事務所より調査依頼。

7月1日 松本建設事務所、市土木課、市教育委員会により、調査対象箇所の現地協議。

7月2日 埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について松本建設事務所へ承諾回答。

7月8日 発掘調査面積および発掘調査費用の一部変更。

7月20日 埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について松本建設事務所と委託契約締結。

7月26日 塩尻市文化財調査委員長中島章二氏を団長とする吉田向井・千本原遺跡発掘調査団に調査を再委託。

7月27日 野村公民館において地元関係者説明会。

7月30日～9月8日 現場における発掘調査を実施。

11月8日 発掘調査終了届の提出。

11月8日 埋蔵文化財拾得届の提出。

11月14日 埋蔵物の文化財認定について通知。

発掘調査委託契約書（一部のみ記載）

1. 発掘調査地 塩尻市大字広丘吉田 吉田向井遺跡

塩尻市大字広丘高出 千本原遺跡

2. 委託期間 昭和63年7月20日から昭和64年3月10日まで

ただし現場における発掘調査は昭和63年9月14日までに完了するものとする。

3. 委託料 3,703,000円

4. 調査報告書作成部数 300部

第2節 調査体制

団長 中島 章二（塩尻市文化財調査委員長）

担当者 烏羽 嘉彦（長野県考古学会員、市教委）

調査員 小林 康男（日本考古学協会員、市教委）

市川二三夫（長野県考古学会員）

調査補助員 龍堅 守（信州大学学生）

参加者 赤津道子、伊藤重次、小沢甲子郎、川上奈美江、黒沢広光、小松義丸、小松静子、
小松幸美、小松鈴子、小松礼子、桜井洋子、高橋鳥飼、高橋阿や子、高橋タケ子、
手塚きくへ、中野やすみ、中村洋子、藤松謙一、松下おもと、村山 明、山口仲司、
吉江みより、太田 和、中野元広、市川きぬえ、一ノ瀬 文、足立幸子、古厩馨子、
太田正子、中村ふき子。

事務局 塩尻市教育委員会教育長 小松 優一

市教委総合文化センター所長 清水 良次

〃 文化教養担当課長 横山 哲宜

〃 文化教養担当副主幹 三澤 深

〃 平出遺跡考古博物館館長 小林 康男

〃 平出遺跡考古博物館学芸員 烏羽 嘉彦

第3節 調査日誌

吉田向井遺跡

昭和63年7月30日(土) 晴 重機による表土除去開始。調査区全域にわたり表層にはコンクリートブロック、U字管等、工事残骸がおびただしく、それらの影響する40~50cmの深さまで除去する。

7月31日(日) 定休日

8月1日(月) 晴 重機による表土除去続き。器材搬入。調査区およびプレハブ設置箇所の草刈り。

8月2日(火) 晴 器材搬入。プレハブ設営。

8月3日(水) 晴 本日から作業員参加による発掘調査開始。朝、結団式を行なう。挨拶、説明の後、調査区北端より助兼による表土削平作業開始。調査区南端より5m間隔でクイ打ちを行ないグリッドを設定。

8月4日(木) 晴 昨日に引き続き調査区中央域の削平作業。土師器片、須恵器片、寛永通宝

2枚出土。

8月5日(金) 晴 調査区中央域の削平作業継続。南側で打製石斧出土。

8月6日(土) 晴 調査区南側の削平作業。最南端は道路工事の際、埋設したと考えられる砂利がおびただしく、堅硬で作業が難行する。本日で旧水田の床土上面をほぼ露呈する。

8月7日(日) 定休日。

8月8日(月) 晴のち一時雷雨 調査区の南と北の両側から中央へ向かって削平作業。北側は床土から10cm厚下げたが、土師器片、須恵器片、石鏃、砥石が出土し始める。

8月9日(火) 晴 削平作業継続。北側で土師器壺、須恵器片頻繁に出土。塙尻高校生3名来訪。

8月10日(水) 雨 雨天中止。

8月11日(木) 晴 削平作業継続。旧水田の床土面の削平のため堅硬で作業難行する。土器片僅かに出土。

8月12日(金) 雨 雨天中止。

8月13日(土)~16日(火) お盆休み。

8月17日(水) 曇 調査区中央および南端の床土剥ぎから作業を開始する。昨日の雨のおかげで土が柔かく、作業はかかる。土師器、須恵器、灰釉陶器片の出土量が増えてくる。

8月18日(木) 晴 BグリッドおよびIグリッドで土器、焼土を伴う礫群を検出。住居址のカマドの存在を伺わせる。午後激しい夕立があり、北熊井でヒョウが降る。

8月19日(金) 曇 Bグリッドのカマドを北側に配する方形の黒色落ち込みを検出。第1号住居址とする。Iグリッド付近に中世の内耳土器出土。

8月20日(土) 曇 作業開始直前まで降雨だったため、参加者が少ない。Aグリッドで柱穴を4基検出し建物址の存在が伺われたため、付近を再精査する。

8月21日(日) 定休日。

8月22日(月) 晴 本日より市道分の発掘調査が開始したため作業員を分ける。一昨日に引き続きD~Fグリッド付近の削平作業を行なったが出土遺物僅少。

8月23日(火) 晴 D、Eグリッド付近削平作業継続。

8月24日(水) 晴 削平が暗褐色土層(中世・平安包含層)に達したため、遺構検出を中心から二手に分かれて始める。

8月25日(木) 晴 遺構検出作業継続。

8月26日(金) 晴 調査区北側は暗褐色土の下に再び黒色土が存在するため、遺構の落ち込みと紛らわしく困難を極める。Jグリッド付近に中世の土壤(集石墓)数基検出。

8月27日(土) 晴 住居址らしき落ち込み6ヶ所と中世土壤の掘り下げ開始。グリッド遺物取上。

8月28日(日) 定休日。

8月29日(月) 晴 第1号住居址カマドセクション図化。土壤1~3、写真撮影、集石実測。

8月30日(火) 晴 第1号住居址セクション図化、床面精査。第2号住居址は第3号住居址と貼床重複の関係にあり、貼床部を追う。第4号住居址、覆土中より内耳土器出土。

8月31日(水) 晴 第1号住居址平面図測図、写真撮影。土壤平面図測図、写真撮影。

9月1日(木) 晴 第2号、第3号住居址、平面図測図、写真撮影。土壤平面図測図、写真撮影。

9月2日(金) 晴 第4号住居址、平面図測図、写真撮影。建物址、平面図測図、写真撮影。土壤、平面図測図、写真撮影。調査区全体図測図。

9月3日(土) 晴 第4号住居址セクション図化、写真撮影。土壤、堅穴状遺構、平面図測図、写真撮影。全体写真。器材片付。本日をもって現場における発掘作業終了。

9月8日(金) 晴 重機による埋戻し作業。プレハブ撤収。

千本原遺跡

8月11日(木) 晴 重機による掘削調査。-130cm~-180cmの深さまで掘削したが、遺構遺物が皆無のため写真と柱状図、および平面図をとり埋め戻す。

整理作業は9~2月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、註記、復元作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の実測、図版作成。また、報告書の原稿執筆を行う。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
吉田向井	塩尻市大字広丘吉田 2574番地外	水田	包蔵地	24,000m ²	900m ²	720m ²	720m ²	3,200,000円
千本原	塩尻市大字広丘高出 1355-3番地	畑地	包蔵地	—	280m ²	120m ²	120m ²	503,000円

第1表 発掘調査経過表

月 遺跡名	7	8	9	10～2	主な遺構	主な遺物	
吉田向井	30	8		遺物整理 図面作成 原稿執筆	平安時代住居址 中世 住居址 中世 建物址 中世 土 壤 堅穴状遺構	1 3 1 12 1	縄文時代 上器、石器 平安時代 土師器、須恵器、灰釉陶器 中世 内耳土器、かわらけ
千本原		11		遺物整理 図面作成 原稿執筆	なし	なし	

(事務局)

第II章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境

塩尻市の広丘地区は市の北部中央に位置するが、市内7地区の中では最も人口が多く、その5分の2を占めている。ここはほぼ中央を南北に縦貫するJR篠井線と国道19号線を中心として栄え、隣接する松本市の住宅地として県下でも有数の人口急増地帯となっている。地区的東西両縁には東山山麓から流下する田川と木曽谷から流出する奈良井川が北流しており、背後には東側に高ボッチ山(1,665m)、鉢伏山(1,929m)に代表されるなだらかな筑摩山地の山なみが、また西側に北アルプスの急峻な山稜がそれぞれ控えている。

この付近の地形の形成は、奈良井川と田川の両河川によって搬入された砂礫層からなる沖積層を基盤とする。奈良井川は木曽川と、田川は天竜川とそれぞれ分水嶺によって表裏日本を分けるものであり、両河川は塩尻市内では並流しているが松本市内へ入ると合流し、速く日本海へ信濃川の末流となって運ばれていく。

田川は岡谷市との市境となる塩尻峠に源を発し、塩尻東地区を経て大門市街地の直前で向きを北にかえ、東側丘陵に沿って北流する。この北流は糸魚川・静岡構造線上の断層によって形成されたリニア線に沿うものである。第四紀洪積世末期に大門市街地を乗せる桔梗ヶ原台地に隆起運動が起り、西側が東側に比して差別的に隆起したために、奈良井川沿いに4段の明瞭な河岸段丘が発達しているのに対し、田川沿いには顯著な段丘が見られない。

しかしこのような河岸段丘域は広丘地区になると野村の東西橋付近までに限られ、それより北側は松本平の低平地に入り、河岸段丘といった浸食環境よりもむしろ自然堤防や氾濫原を形成する堆積環境の要素が強い場所といえよう。

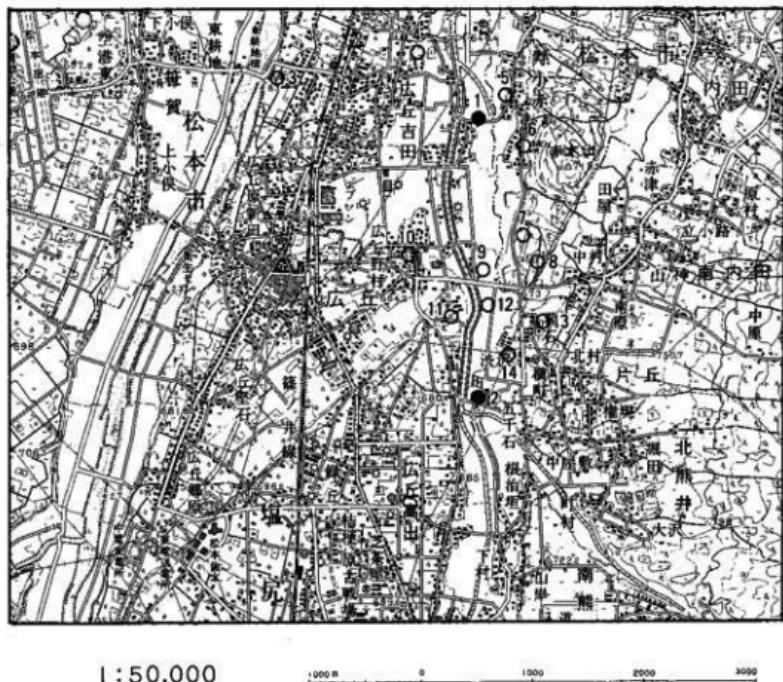
第2節 周辺遺跡

今回調査対象となった地区は、松本平南半域の田川沿いに位置するが、従来までのこの地域は高出遺跡群に代表される丘中学校以南の遺跡に発見例が多く、それ以北の遺跡は調査例も希薄でほとんど未知の状態であった。しかし昭和57年の吉田向井遺跡の発掘を始めとして近年、急速に発掘調査が行なわれるようになり、単に資料が増加したばかりでなく、この地域の原始・古代の様子を垣間見る新知見を数多く提供することとなった。

本遺跡と同じ広丘吉田地区の代表的な遺跡としては田川を挟んで対峙する吉田川西遺跡がある。ここは從来より縄文中期、弥生時代の大形蛤刃石斧、石包丁、土師器、須恵器などの出土が

みられたが、昭和60年に行われた中央道長野線関連の発掘調査では奈良から近世に至るまでの多量の遺構・遺物が発見され、中でも平安時代は住居址271軒、建物址8棟、土塙340基、溝22基とそれらに伴う縄文陶器セット、輸入陶磁器などかなりの有力者の存在を伺わせる資料が提供されている。他には中世の居館址として知られ、他に縄文、平安時代の遺物の出土もみられる長者屋敷遺跡、昭和56年、大量の古銭出土で話題となった若宮遺跡などがある。

吉田向井遺跡と小田川をはさんで対峙する松本市小赤遺跡は、昭和57年度の調査によって近世から現代にわたる暗渠排水溝と中世の鍛冶場遺構が発見されている。更に、小赤遺跡の背後にある赤木山は遺跡の稠密地帯で、縄文時代中期を中心として縄文時代前期から平安時代にかけての石行、赤木、原度前、清水林、白神場、横山城など10数ヶ所の遺跡が展開しており、赤木山遺跡群と総称されている。



第1図 遺跡位置図

田川沿いの遺跡に目を落とすと、吉田向井遺跡の南方2kmに縄文時代中期および弥生時代後期の土器を出土した花見遺跡、縄文・平安時代の遺物を得ている野村遺跡がある。また昭和53年に発掘調査が実施された高田遺跡では、平安時代に属する3軒の住居址を検出している。またここから以南の左岸段丘縁（桔梗ヶ原面）は遺跡の密集地帯となっており、いわゆる高出遺跡群を形成している。高出遺跡群は、広丘高出、野村の両区にわたって展開し、南北3.2km、東西300mの広範囲に分布する諸遺跡を包含した総称である。この遺跡群で発掘調査されたものとしては、北から丘中学校（先土器、弥生～古墳の方形周溝墓1、平安時代住居29）、黒崖（先土器、縄文早期、平安時代）、北原（先土器、縄文中期、弥生後期住居4、平安住居3、柱穴址2）、一夜壁（縄文早期）、上村（平安住居3、柵列）があり、他に未調査の9遺跡が存在する。この他、田川の右岸には昭和60年に発掘調査が行われ、平安住居1、方形周溝墓1、ロームマウンド5が発見された君石遺跡、縄文中期、弥生後期の遺物の得られた淡沢遺跡がある。

第III章 調査遺跡

第1節 吉田向井遺跡

1 位置

吉田向井遺跡は塩尻市広丘吉田向井地蔵にあり、JR 広丘駅から北東へ 2 km の地点にある。付近一帯は田川の氾濫原を利用した水田地帯が広がっており、ところどころに自然堤防の微高地上有発生した田谷・向井などの集落がみられる。遺跡は田川右岸の、現在、墓地に利用されている付近を中心とした自然堤防上に立地しており、海拔は最も高所で 646 m を測る。東側は中央道長野線の東脇を流れる小田川付近と考えられ、ここが隣接する松本市との市境となっている。田川の西側には吉田川西遺跡が広く展開しており、市内を代表する平安時代の大集落址がここに所在している。

調査地区は先に県営田川地区圃場整備事業と中央道長野線建設工事に伴う発掘調査が実施された両地区の間に位置し、狭いながらも調査の空白地帯となっていた箇所である。本来、県道用地全てが調査対象となるはずであるが、市道より南側はすでに圃場済となっており、また北側は先の調査により遺跡の北限とされた箇所までとなり、長さ 94 m、幅 7 ~ 8 m、総面積 720 m²が調査対象となった。

調査はまず、バックホーによる表土除去を行なったのちグリッドを設定した。グリッドは 5 m 間隔で南から北へ向かって A ~ R となっている。

2 過去の調査経過

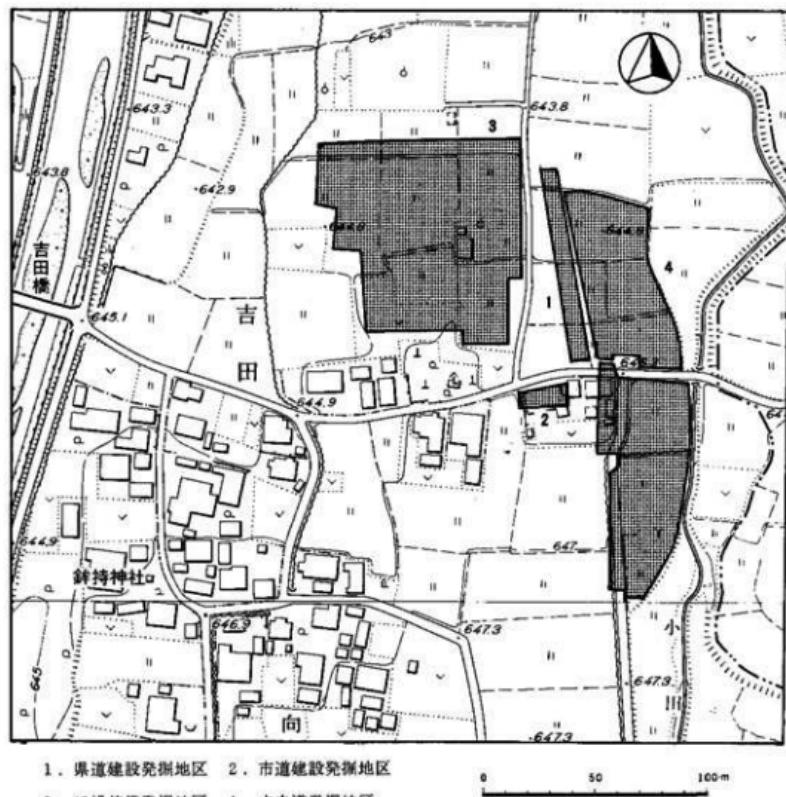
吉田向井遺跡の発掘調査は、過去 2 回実施され、今回が 3 回目の調査である。

最初の調査は、昭和 57 年度県営田川地区圃場整備事業に伴ったもので、昭和 57 年 7 月 25 日から 9 月 30 日にかけて実施された。調査地域は、今回の調査地の西側で、4200 m²にわたって発掘が行われた。この結果、9 世紀から 11 世紀後半ないし 12 世紀にかかる 85 軒の竪穴住居址、3 軒の建物址、3 基の小堅穴が検出され、平安時代の大集落地であることが判明した。それらは 3 棟の建物址を中心として、これをとり囲むように東西 88 m、南北 60 m の構円形状の範囲に住居址が展開するという集落形態を示していた。調査後の整理、報告では、出土土器の様相から 4 段階の変遷が見えられ、I 期 3 軒、II 期 13 軒、III 期 18 軒、IV 期 34 軒という移り変わりが推定されている。平安時代に属するこれだけの規模を有する集落址は、松本平では平出遺跡の調査以来のこと、以後の当地域での平安時代集落を考えるうえで欠くことのできない資料となっている。

この調査の 3 年後の昭和 60 年 8 月から翌 61 年 11 月にかけて、中央道長野線建設に伴う発掘調査が実施された。調査地域は、今回調査地域の東に接する地域で、5160 m²にわたっている。この調

査では、平安時代の15軒の住居址、2つの溝卦のほかに、昭和57年度の調査ではその存在が全く知られていないかった縄文時代中期の住居址2軒、遺物集中区1ヶ所と古墳時代の土壙1、遺物集中区そして、中・近世に属する建物址2、竪穴状遺構1と200ヶ所にもおよぶ土壙が検出され、本遺跡の多様な様相が明らかとなった。とりわけ縄文中期藤内期の一括資料を出土した1号住居址、和鏡を副葬した中世墓塚の存在は注目された。

今回の調査は、以上の2回の調査につづくもので、調査地域は、2回の既調査地区のちょうど中間に位置している。また、同時に実施された市道拡幅に伴う調査も両地区にはさまれた場所であり、これら4回にわたった調査を総合することにより、吉田向井遺跡の様相はより詳細に考察し得るものとなった。

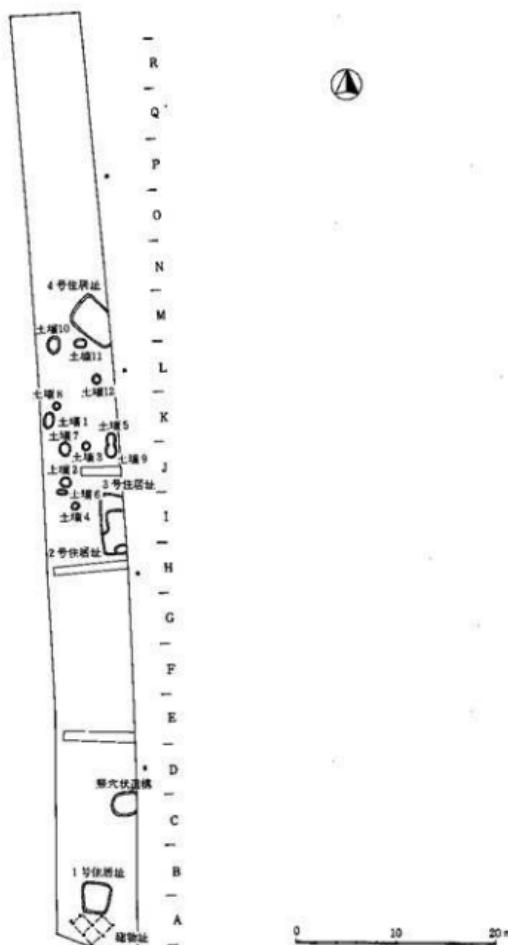


第2図 調査地区図

3 調査概要

今回調査された吉田向井遺跡は、塩尻市広丘吉田向井地籍にあり、田川右岸の自然堤防上に立地する。調査は県道用地について全面発掘調査が行なわれ、調査総面積は720 m²である。

この結果、遺構としては平安時代後期の竪穴住居址1軒、中世の竪穴住居址3軒、建物址1棟、

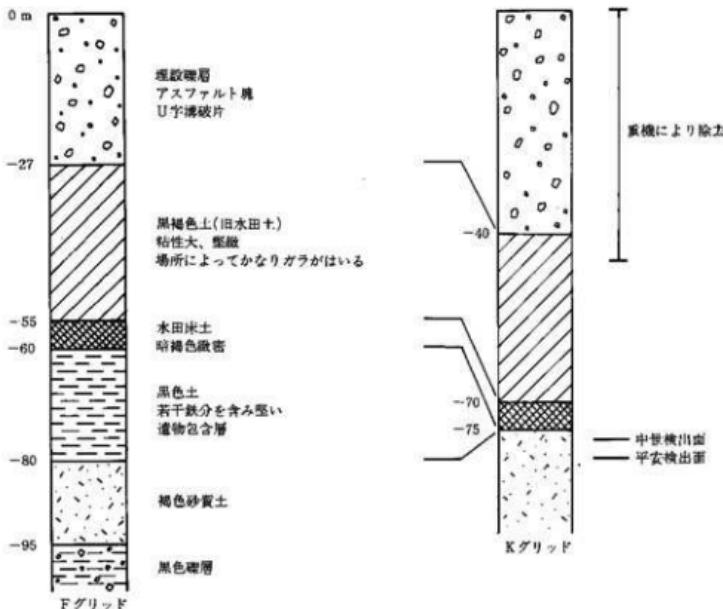


第3図 吉田向井遺跡全体図

土壤12基のはか時代不明の堅穴状遺構が検出された。また出土遺物としては、これらに伴う土器、陶磁器、石器が出土した。

平安時代の住居址は調査区南端で検出され、小形ながらも遺存状態がよく、カマド周辺から多量の土器を出土した。中世の住居址は調査区北半部で検出され、いずれも調査区外にかかるため全容を表わすことはできなかったが、内耳土器など良好な資料を出土している。建物址は2間×2間の小形のもので、平安時代の住居址と一部重複している。土壤は調査区北半部に集中しており、12基のうち7基に集石が入れられていた。中世住居址は本遺跡では初めての発見となつたが、建物址、土壤については東側の隣接地にあたる中央道長野線の発掘現場から多数確認されており、位置関係からそれらの一部と見えられる。

遺物としては土師器杯、甕、中世かわらけ、内耳土器、中近世陶磁器、たたき石、打製石斧が出土した。



第4図 層序断面図

4 遺構・遺物

1) 住居址

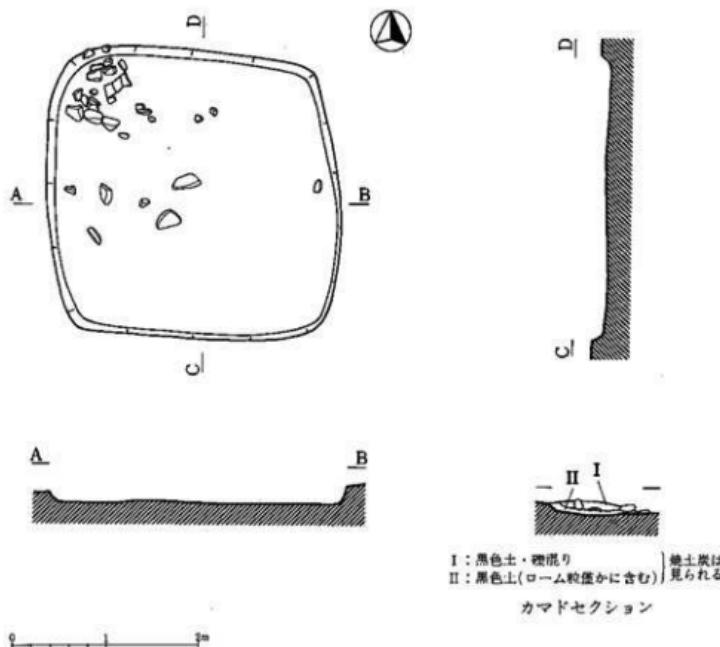
第1号住居址

遺構 本址は調査区の最南端にあり、A・Bグリッドに位置する。南側には中世の建物址が一部、重複で配されている。中世の面である暗褐色土層を削平していたところ遺物を伴う礫群が検出され、出土状態からカマドの存在が伺われた。更に周囲を注意深く削平精査したところ礫群の南側にはほぼ方形を呈する黒色のプランが検出され住居址と判明した。

住居址は隅丸方形で、カマドのある北西隅がやや張り出す平面プランを有する。壁高から上層部がかなり削平されていることが推測され、正確な規模にはやや明確さを欠くが、現存部で南北3.10 m、東西3.14 mを測り、やや小形の住居址である。

壁は非常に浅く、東壁8 cm、西壁10 cm、北壁9 cmを測るにすぎない。小砂利混りの土層をほぼ垂直に掘り込んでいるため崩れ易く、乾燥すると特に顕著である。

床は小砂利混りの面に薄くロームを敷き、踏み固めて構築している。そのため中央部に比べて

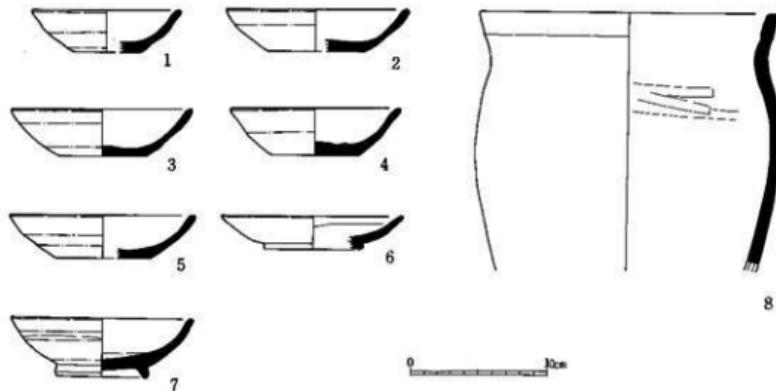


第5図 第1号住居址

周囲の壁沿いは軟弱である。ほぼ平坦の床面であるが全体的に北側へ緩く傾斜しており、比高差は6 cmを測る。中央から北寄りにかけて床面直上に認められる数個の礫を取り上げ床面上を精査してみたが、ピット、周溝等の施設はなんら確認することはできなかった。

カマドは住居址の北西隅に石組み粘土カマドが設けられている。左袖部は礫が縦に並んで残存していたものに対し、右袖部は崩壊を受け、粘土のみがその配置を留めていた。カマド内には数個の土師器、須恵器が残されており、中央部には支脚石も存在していたが、焼けた痕跡は弱く、焼土、灰も目立つものは認められなかった。

遺物 本社出土の遺物には、土師器の杯・甕・灰釉陶器碗皿がある。今回検出された遺構の中では最も出土が多かったが、それでも図示できたのは8個体にすぎない。出土は、カマドを中心とした北壁寄りの床面上に集中している。土師器杯1~5は、いずれも高台をもたず、底部に回転糸切り痕を残す。口径11 cm以下の小形のものと口径13 cm前後のものがあり、後者が大半を占め、概して小形である。灰釉陶器皿6、7はともに焼成良好。6はロクロ成形痕を残し、7は体部下半および底面に回転ヘラケズリ痕が観察される。土師器甕8は、胴下半部を欠失しているが、口径21.3 cmを測る大型品。外面はロクロを利用して器面を平滑にし、内面は一部にヘラケ



第6図 第1号住居址出土土器

土器観察表

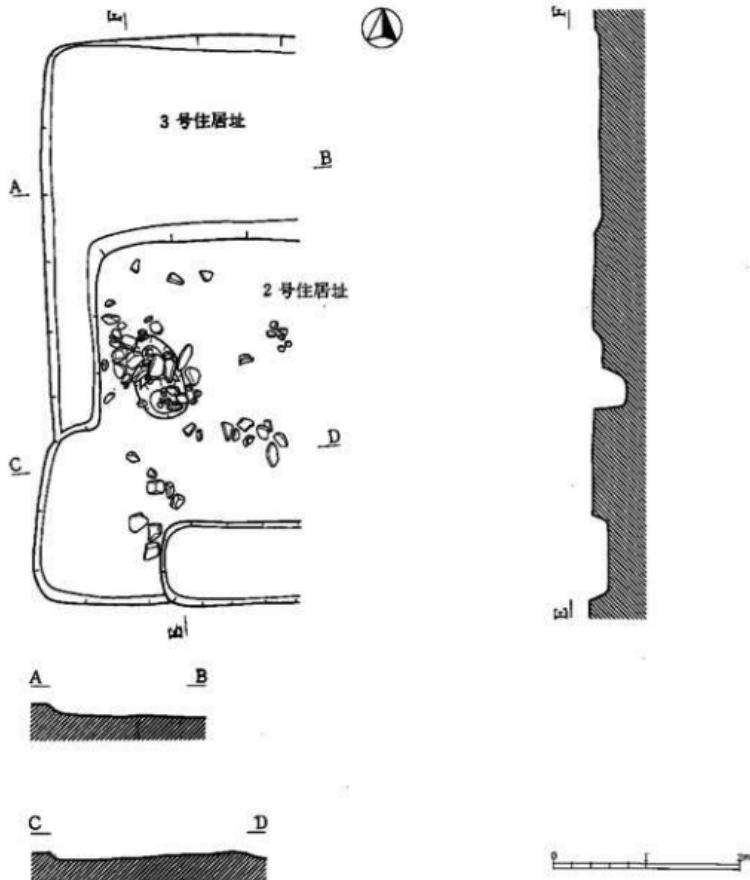
番号	発掘区	種別	器種	法徴 (mm)			色調		焼成	成形調整方法		備考
				口径	底径	高さ	内	外		外面	内面	
1	1 H	土師	杯	106	45	30	明褐色	明褐色	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	
2	1 H	土師	杯	129	70	30	暗褐色	暗褐色	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	
3	1 H	土師	杯	127	60	34	淡褐色	淡褐色	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	
4	1 H	土師	杯	121	50	34	黄褐色	黄褐色	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	
5	1 H	土師	杯	133	67	31	暗褐色	暗褐色	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	
6	1 H	灰釉	皿	129	67	24	灰白色	灰白色	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	
7	1 H	灰釉	皿	130	63	42	灰白色	灰白色	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	1 H	土師	甕	213	—	—	淡褐色	淡褐色	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	

ズリ痕がみられる。

これらの遺物は、10世紀前半に相当する。

第2号住居址

遺構 本址は調査区中央のF・Gグリッドにあり、東半部が調査区外にかかったため、西半部のみの検出となつた。本址の北側には第3号住居址が重複しており、貼床で後者の上に構築され



第7図 第2・3号住居址

ている。遺構検出時に土器や炭・焼土を含むおびただしい礫群が発見され何らかの遺構の存在が伺えたが、床面が明瞭でなかったため、壁の全容を検出して住居址を確認した。

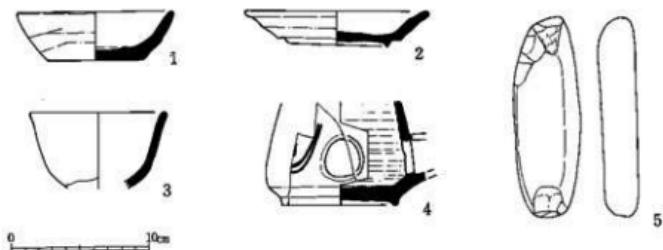
プランは西半分のため全容を明らかにすることはできないが、隅丸方形の平面形態を有し、南北で410 cm を測る。図では北西隅を欠いているが、貼床部を気づかず掘り下げてしまった跡である。

壁は非常に浅く西壁で8 cm、南壁で5 cm を測るにすぎない。これは上層が搅乱等でかなり削平されたことに起因すると思われる。

床面は中央がやや盛り上がるが、平坦で概して綺っている。床面上にはおびただしい礫が散在しており、そのほとんどは性格が把えられないが、中央東寄りのものは多量の炭・焼土を伴なっており、また南側の3個は石臼炉のように配列がなされていた。ピットは中央北寄りに1基あり、深さ36 cm と比較的深い。南壁沿いにみられる小堅穴は本址には付隨せず、後世のものと考えられる。

遺物 本址出土の遺物には、カワラケの皿、陶磁器皿、水注、内耳土器、叩石がある。

カワラケ皿1は、器型が厚く、重量感がある。胎土に内耳土器に含まれるような砂粒を含み、内外壁とも黒色を呈する。底面には回転糸切り痕がみられる。陶磁器には、皿・丸碗・水注などの器種がある。2は、全面に美しい淡緑色の灰釉がかかった腰折の皿で、削り出し高台を付す。瀬戸・美濃系の製品で、15世紀末～16世紀に比定される。3は底部を欠く、灰釉丸碗で、美濃大窯の製品。やはり16世紀に比定できる。4は、底部と胴下半の一部のみ残存しその大半を失しているが、かろうじて注口の一部が残っていたため水注ということが分かる。灰釉の上に銅緑釉



第8図 第2号住居址出土遺物

土器観察表

番号	発掘区	種別	器種	法径 (mm)			色調		焼成	成形調整方法		備考
				口径	底径	脚高	内	外		外面	内面	
1	2H	カワラケ	皿	10	67	35	黒色	黒色	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
2	2H	陶磁器	皿	11	70	25	淡緑色	淡緑色	良	ロクロナデ	ロクロナデ	削り出高台
3	2H	丸碗	丸碗	98	—	—	淡緑色	淡緑色	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
4	2H	陶磁器	水注				灰白色	灰白色		ロクロ皮形	ロクロ皮形	鉄造

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
5	2H	叩石	中粒砂岩	143	42	25	267	

を流しかけ、注口脇には弧を描く鉄輪による二重線の文様がみられる。外面は平滑に成形されているが、内面はロクロ痕が顕著である。16世紀の製品。内耳土器は、小片のため図示できなかつたが、口縁および把手部分の破片が得られている。以上のはかに、やや時期的に新しくなるが、16世紀末～17世紀前半にかけての志野（長石釉）の丸皿が3片ほど出土している。また、17世紀に属する鉄絵描きを施した灰釉のかかった壺ないし瓶形態の破片も2片出土した。

叩石5は、長さ14cmほどの扁平な礫の両端に打撲痕を顯著に残すものである。

以上、本址の出土遺物は16世紀を主体とするものであった。

第3号住居址

遺構 調査区中央のGグリッドに存在する。東側が調査区外にかかっているため西側半分だけの検出となつた。南側には第2号住居址が一部、重複しており、貼床により後者に覆われている。遺構検出段階においては第2号住居址と覆土に明瞭な違いがなかったため、当初は一軒の大型住居址の可能性で掘り下げを進めていたが、検出された床面に8cmもの段差があったことから疑問を持ち、貼床の存在を確認したことにより2軒の重複と断定した。

住居址の一部が検出されただけであったため、プランは把握できないが、残存壁より隅丸方形の平面形態を有するものと思われる。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、西壁で10cm、北壁で7cmの壁高を測る。壁高が浅いのは第2号住居址と同様に削平によるものと思われる。

床面はやや北側へ傾斜するが、概して平坦で、よく綺っている。床面上にピット、周溝等の施設はみられなかった。

遺物 本住居址の出土遺物は大変少なく、図示できるものはなかった。

第4号住居址

遺構 調査区北側のMグリッドに位置し、検出された遺構の中では最も北側に発見された。調査区東壁沿いに検出され、住居址の東壁および北壁の一部が調査区外にかかっていたため、全容を把握することはできなかった。

この付近から北側にかけては土層の攪乱が著しく、また砂利層がおびただしいことから、検出段階においては遺構の存在すら危まれており、本址も色相の異なる箇所にベルトを残し掘り下げたところ床面を確認し、漸く住居址と判断されたものであった。

住居址の全容が検出できなかったためプランは把握できないが、残存壁の在り方より推して隅丸長方形の平面形態を呈すると推察され、主軸方向はN-53°-Wを指す。規模は東西500m、南北340mを測る。

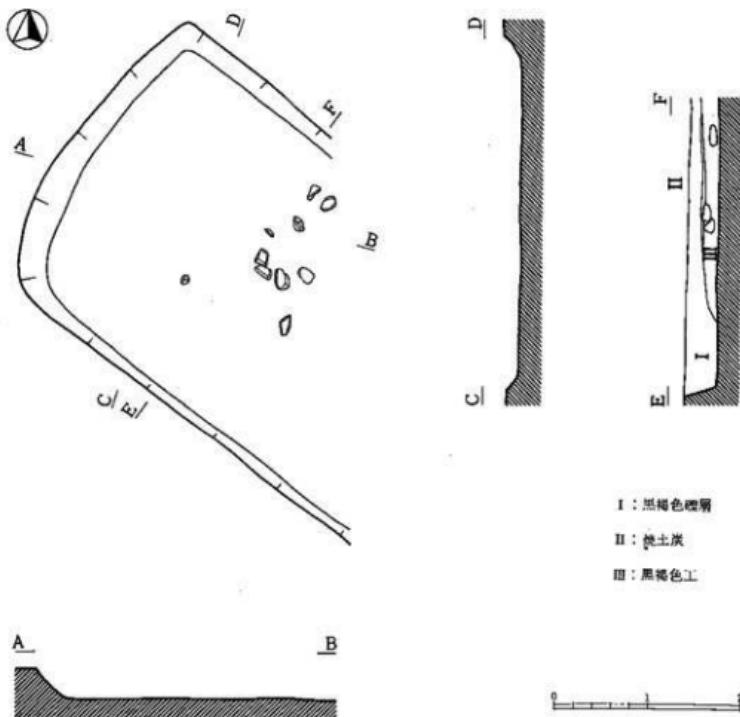
壁はほぼ垂直に掘り込まれた良好な壁で、北壁30cm、西壁32cm、南壁30cmとほぼ同じ壁高をとる。

床面は水平、平坦で、比較的よく踏み固められているが、とりわけ中央から南寄りに堅敏な面

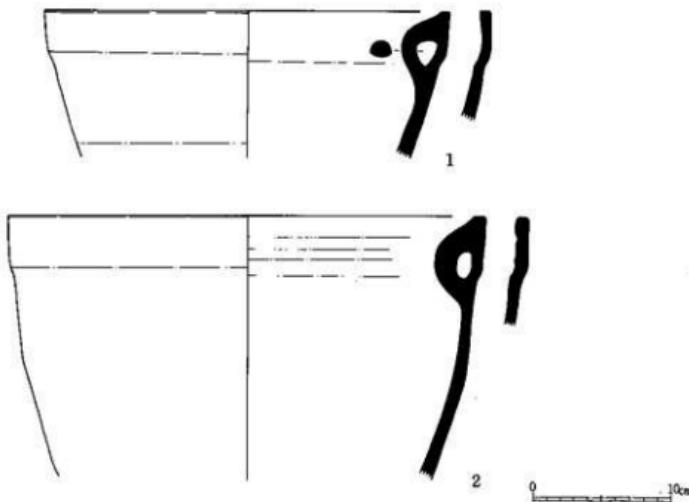
を残している。中央やや北寄りの床面には数個の礫が散在しており、大量の内耳土器片と焼土を伴なっていた。状況から炉としての役割を持っていたものと推察される。

床面および壁外にも柱穴と思われるビットは検出されなかった。

遺物 本址から出土した遺物は極めて少なく、わずかに図示した内耳土器 2 個体分が得られたにすぎない。1 は、口径 29 cm ほどのやや小形品で、わずかにくの字状に屈折しながら直立する口縁部に連続しており、耳は口縁部から數ミリ下に付されている。ロクロ成形痕を残す。外面には煤の付着が顕著である。2 は、口径 34 cm と 1 よりやや大型で、床面上から大型破片の一括出土資料として得られた。胴部と接合はできなかったが、底部の出土もみられる。底部付近からやや外方に張り出しながら、直立する口縁に接続している。耳は 1 同様口縁端部からわずか下に付されている。口縁部内外面ともにロクロ成形痕が著しく、胴下半には、わずかに縱方向のナデが行



第9図 第4号住居址



第10図 第4号住居址出土土器

土器観察表

番号	発掘区	種別	法仔 (mm)			色調	焼成	成形調整方法		備考
			口径	底径	高さ			外面	内面	
1	4 H	内耳土器	288	—	—	暗褐色	黑色	良好	ロクロ成形	ロクロ成形
2	4 H	内耳土器	340	—	—	暗褐色	黑色	良好	ロクロ成形	ロクロナデ

われていた痕跡が認められる。外面胴上半部に煤の付着が顯著。

本址出土の内耳土器は、御社宮司遺跡でのA III型に類するもので、16~17世紀初頭にかけてのものと考えられる。

第2表 住居址一覧表

住居	グリッド	規模	平面形	主軸方向	壁 高	炉 カマド	位 置	床面	周溝	切合い 関係	時 期
1	A, B	314×310	隅丸方形	—	8, 11, 10, 9	石組粘土 カマド	北西隅		ナシ		平安後
2	F, G	410×—	(隅丸方形)	—	—, 8, 5, —	石門炉	中央南寄	貼床	ナシ	→ 3 H	中 世
3	G	(420)×—	(隅丸方形)	—	—, 10, —, 7	—	—	—	ナシ	→ 2 H	中 世
4	M	500×340	隅丸長方形	N-43°-W	—, 32, 30, 30	石門炉	中央北寄		ナシ		中 世

2) 土壙

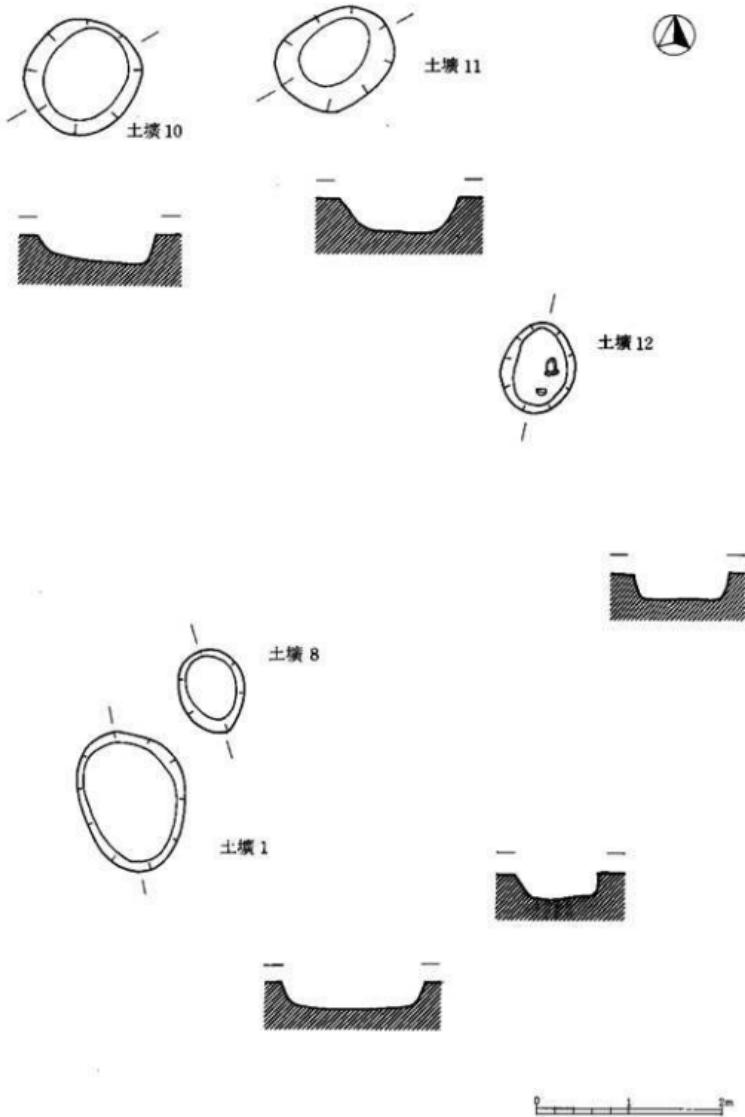
第3号住居址と第4号住居址の間に12基の土壙が検出された。これらは両住居址と同レベルで検出され、また内耳土器を出土するものもあるところから、ほぼ時期を中世に限定してもよいだろう。この傾向は隣接する中央道長野線の発掘調査地区にも反映しており、200基近い同時期の土壙が確認されている。その3分の1は覆土に礫が入るものであったが、今回の12基においても3分の2に近い、7基において数個から10数個の礫が故意に入れられていた。また1号土壙には覆土中の礫の中に多量の焼土・炭も混入していた。形態的にみると長さが70~130cm、深さが20~50cmと近似しており、また底が平坦であることも共通している。これらの状況を勘案して検出された土壙のはほとんどは墓壙（一部火葬墓も考えられる）とみるのが妥当であろう。

12基の土壙中、遺物の出土は、1・2・3・5・6・7・8・9号のみであった。

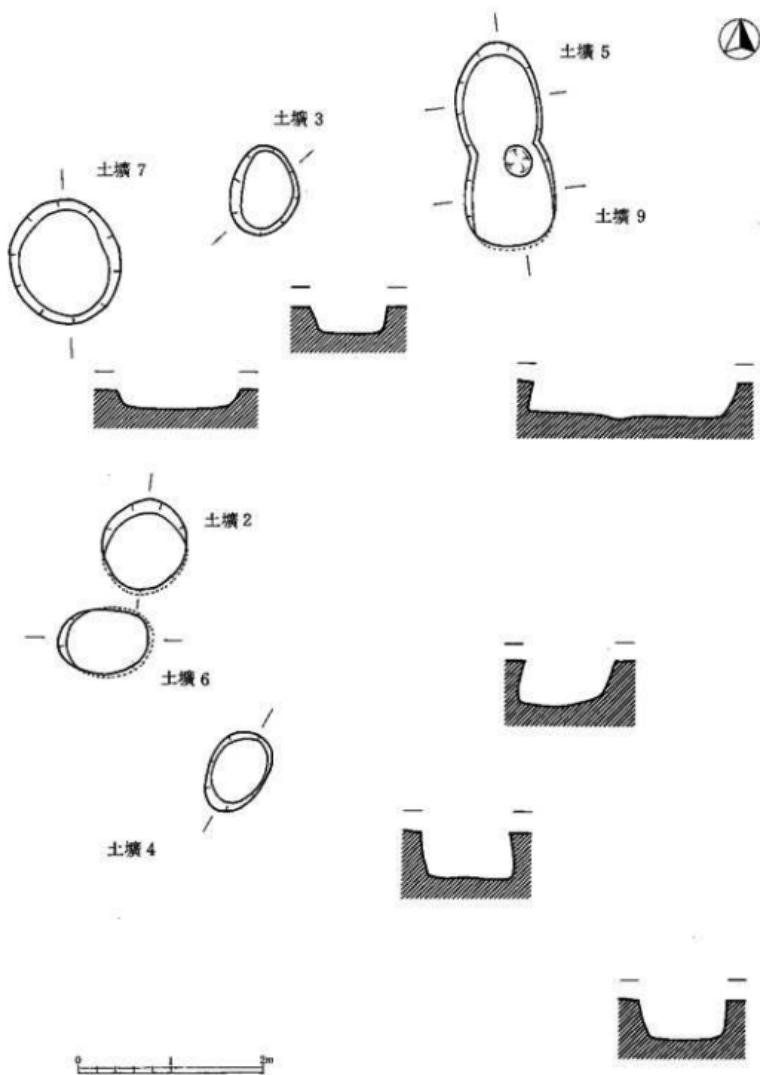
1号址からは土師器壺、須恵器壺が得られている。図示した1・2とともにロクロナデ痕を顕著に残す。9世紀後半に比定される。2号址からは、図示した3の灰釉陶器の皿ないし碗の底部と、他に灰釉陶器段皿2片を土師器底小片1片とが出土した。3の灰釉陶器皿は、底皿に糸切り痕を残し、高台は外方に張り出す。段皿は1片が丸石2号窯11世紀末のもので、他の1片はK90・9世紀後半併行の尾北窯産。3号址からは、4に図示した横円型石器が1点出土した。貢岩製の粗雑なものである。5号址からは、5の土師器皿が1点出土した。小形で器高の浅いもので、底面に回転糸切り痕を残す。11世紀末~12世紀にかけてのものである。6号址からは、土師器壺、内耳土器、中世陶磁器が出土した。6は、土師器壺、底面に回転糸切り痕を残す。中世陶磁器は、灰釉折り縁皿の破片で、16世紀前半、大窯の製品である。6号址は、土師器壺の略完形品の出土から10世紀前半に比定しえよう。7号址では、図示し得る遺物は出土しなかつたが、9世紀代に属する土師器壺、須恵器壺の小片が数点出土した。8号址からは、須恵器壺が1点出土した。7は、口縁部を欠き、底面に回転糸切り痕を有する。9号址からは、8に示した足高の高台を付した壺が出土した。11世紀末から12世紀にかけての所産である。

第3表 土壙一覧表

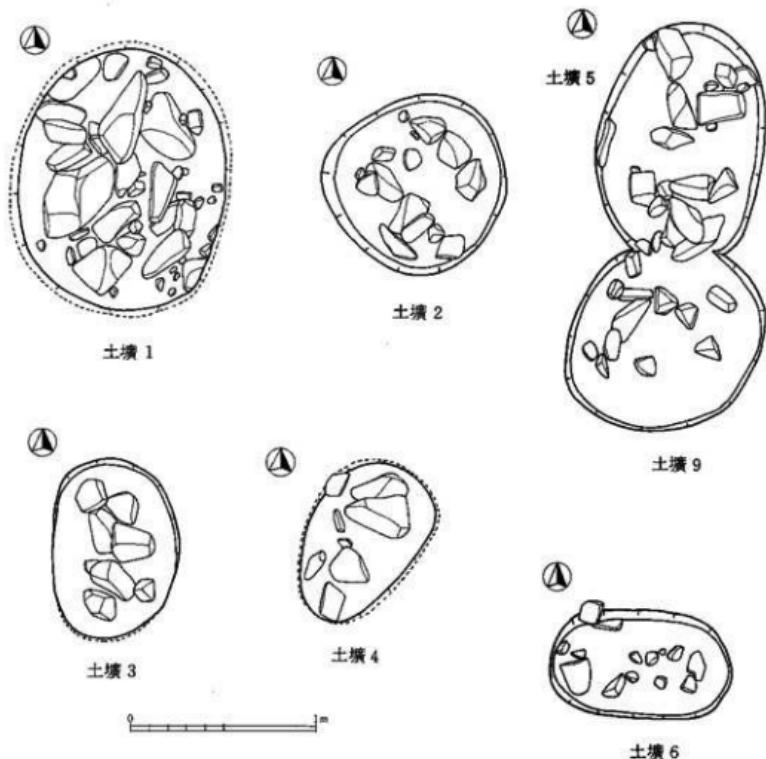
No.	確認規模	平面図	主軸方向	断面図	底面規模	底面	深さ	備考
1	156×116	椭円	N-36°-W	たらい状	130×92	平坦	31	含礫、焼土、炭
2	98×88	椭円	N-16°-E	袋状	88×80	平坦	48	含礫
3	96×70	椭円	N-4°-W	たらい状	80×56	平坦	28	含礫
4	92×64	椭円	N-30°-E	たらい状	64×54	平坦	43	含礫
5	(114)×90	椭円	N-8°-W	たらい状	(104)×66	平坦	38	含礫
6	98×70	椭円	E-W	袋状	96×76	平坦	49	含礫
7	134×118	椭円	N-3°-W	たらい状	114×94	平坦	20	
8	92×72	椭円	N-14°-W	たらい状	72×52	平坦	27	
9	(120)×100	椭円	N-9°-W	袋状	(120)×84	平坦	36	含礫
10	126×126	円	N-32°-W	たらい状	92×92	平坦	31	
11	128×108	椭円	E-W	たらい状	72×66	平坦	28	
12	100×78	椭円	N-7°-W	たらい状	82×56	平坦	29	



第11図 土壌群(1)



第12図 土壌群(2)

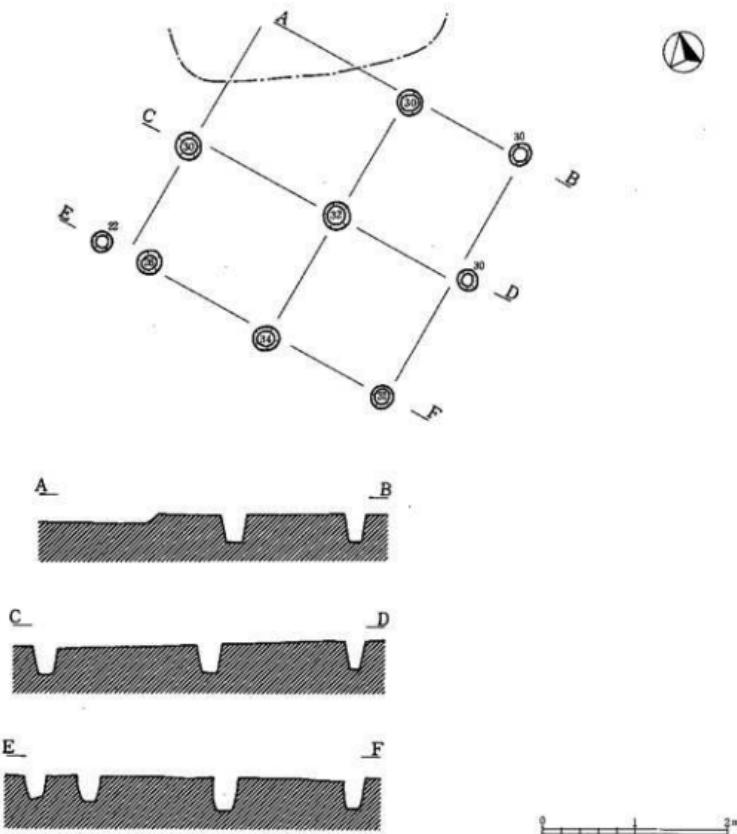


第13図 集石土壌

3) 建物址

調査区最南端で掘立柱建物が1棟検出された。柱穴配置は共に3本ずつであり2間(3.0m)×2間(3.0m)と小形である。方向はN-45°E。柱穴はすべて円形で、径22~30cm、深さ26~36cmを測る。柱廻の認められるものはない。北側隅の柱穴についても当初は第1号住居址覆土に掘り込みが認められたが、手違いから先に第1号住居址の調査が行なわれてしまったため図には記されていない。しかし平安時代後期の住居址覆土に掘り込まれていた事実から他の遺構と同様に中世の遺構とみられる。

吉田向井遺跡ではこれまでに中央道長野線の発掘区で同じ中世の建物址が2棟確認されている。今回検出された建物址はそこから南西方向に僅か25mの位置にあたり関連性が伺える。

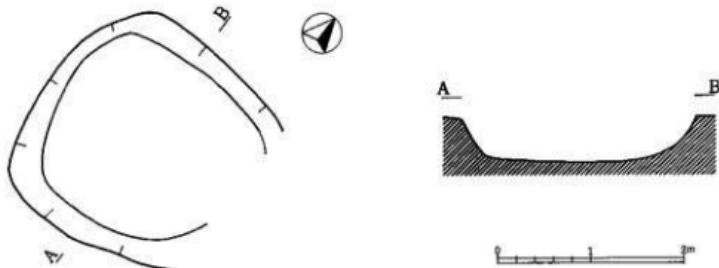


第14図 建物址

4) 壓穴状遺構

C、Dグリッドにまたがり、東側の道路沿いで検出された。東側が調査区域外にあるためプランの全容は把握されないが、隅丸方形に近い形態と考えられる。規模は南北250 cm、東西260 cm（推定）を測り、主軸方向は東西を指す。埋土は黒色土で周囲の他の遺構と一致する。壁の立ち上がりは緩やかで、底は中央に向って下降するいわば舟形の断定形を有する。壓穴の内には施設は全く設けられていない。

本址からは土器の出土はなく、石錐・打製石斧1が出土したのみである。石錐12は、底辺への



第15図 穿穴状遺構

抉りの浅いもので精巧な作りである。打製石斧14は、原石面を大きく残し、周縁にわずかな加工を施している。

5) 遺構外出土遺物

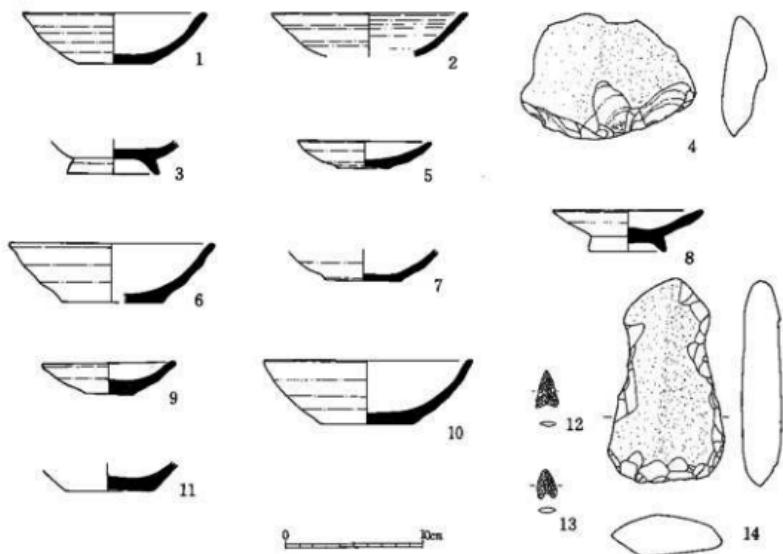
今回の調査では、遺構外からの遺物の出土は極めて少量であったが、平安時代から江戸時代までにわたったバラエティーに富んだ様相を示している。図示し得えたものは数点にすぎないが、出土遺物を概観しておきたい。

10世紀前半に属する土師器坏(16図10)、11世紀末～12世紀の土師器坏9は、器形の知られる数少ない資料である。

このほかに、平安時代に属するものには11世紀末～12世紀に比定される北宋製の白磁のV類碗小片がある。

中世に入ると、16世紀前半の大窯灰釉丸皿、16世紀末～17世紀前半の志野（長石釉）の丸皿、そして、16～17世紀の瀬戸・美濃系の瓶の破片が得られている。

近世のものには、18世紀に属する江戸掛け分けの椀・京焼を模倣した瀬戸・美濃系の椀が出土した。



第16図 土壙・竪穴状遺構、遺構外山土造物

土器観察表

番号	発掘区	種 別	器 様	径 (mm)			色 調	施成	成形調整方法		備 考
				口径	底径	高さ			外 国	内 国	
1	土壤1	土師	环	130	36	36	暗褐色	赤褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ
2	土壤1	須恵	环	140	—	—	黄褐色	黄褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ
3	土壤2	灰陶	直	—	—	—	灰褐色	黄褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ
5	土壤5	土師	环	95	20	20	淡褐色	黑斑あり	良	ロクロナデ	ロクロナデ
6	土壤6	土師	环	146	42	42	赤褐色	黄褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ
7	土壤8	須恵	环	—	—	—	赤褐色	赤褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ
8	土壤9	土師	环	105	39	30	黄褐色	黄褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ
9	G	土師	环	95	22	22	赤褐色	赤褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ
10	G	土師	环	148	45	45	茶褐色	茶褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ
11	F	土師	环	—	—	—	黄褐色	黄褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ

石器観察表

番号	発掘区	種 別	石 器	長さ (mm)	巾 (=)	厚さ (mm)	重量 (g)	特 徴
4	土壤3	横刃形石器	真 砂岩	90	123	50	289	
12	竪穴状遺構	石 鏊	チャート	27	16	3	1.2	
13	M	石 鏊	黒 磁 石	21	14	3	0.9	
14	竪穴状遺構	打 磨 石 手	板 粒 砂 岩	146	83	28	400	

5 まとめ

過去2回の調査と、市道拡幅分を含めた今回の調査によって、田川・小田川の微高地上に立地した吉田向井遺跡は、少なくとも東西160m、南北250mの範囲にわたって展開した大遺跡であることが明らかになった。時代的には、縄文時代草創期・中期・弥生時代中期・古墳時代・平安時代・中・近世と長期間にわたっている。

縄文時代では、今回の調査区域南端から更に南側の地域、現在の向井集落の南部分をその中心としていたようである。市道拡幅部分の調査では、若干の縄文土器の出土が認められている。比較的低平のこの地に中期藤内式という縄文文化極盛期の住居が営まれていたことは該期集落立地を考えるうえで重要である。

弥生中期は、土師器片がわずかに出土しただけの痕跡的な在り方を示している。集落規模の遺跡は、より南方の丘中学校付近に求める必要がありそうである。

平安時代は、本遺跡の最も栄えた時期で、調査区域のはば全域にわたって展開し、101軒の住居址、3軒の建物址が発見されている。集落の中心は、昭和57年度調査の区域で、今回調査した地域は、その東端部分に当たっている。住居分布の密度は高い。

今回の調査を特徴づける成果の1つは、中・近世の遺構・遺物が得られたことである。この時期の遺構・遺物は、すでに中央道用地内から検出されており、これを一体のものと考えられる。現向井集落の東方小田川に沿って集中して発見されており、住居と墓壙群との組み合わせは、この時期の資料が少いことから貴重なものとなろう。

長期間にわたった吉田向井遺跡も、時期ごとにその立地場所を移動している。それが自然環境の変化による外的要因からのものか、集落内部の内的要因によるものかはっきりしないが、集落の占拠問題は今後、解決しなければならない課題といえよう。

第2節 千本原遺跡

1 位置

千本原遺跡は塩尻市大字広丘高出地籍にあり、田川の右岸、低位段丘上に立地する。この付近は片丘丘陵を開析流下する群小の河川が田川へ注ぎ込んでいるが、遺跡はその中の大沢川と権現沢川によって挟まれ形成された微高地土に展開する。

以前はほとんど知られていない遺跡であったが、昭和60年に中央道長野線関連で発掘調査が行なわれた。長さ60mと30mの南北トレンチを2本、重機により掘り下げたが、遺構遺物が認められず調査は1日で終了している。

2 調査概要

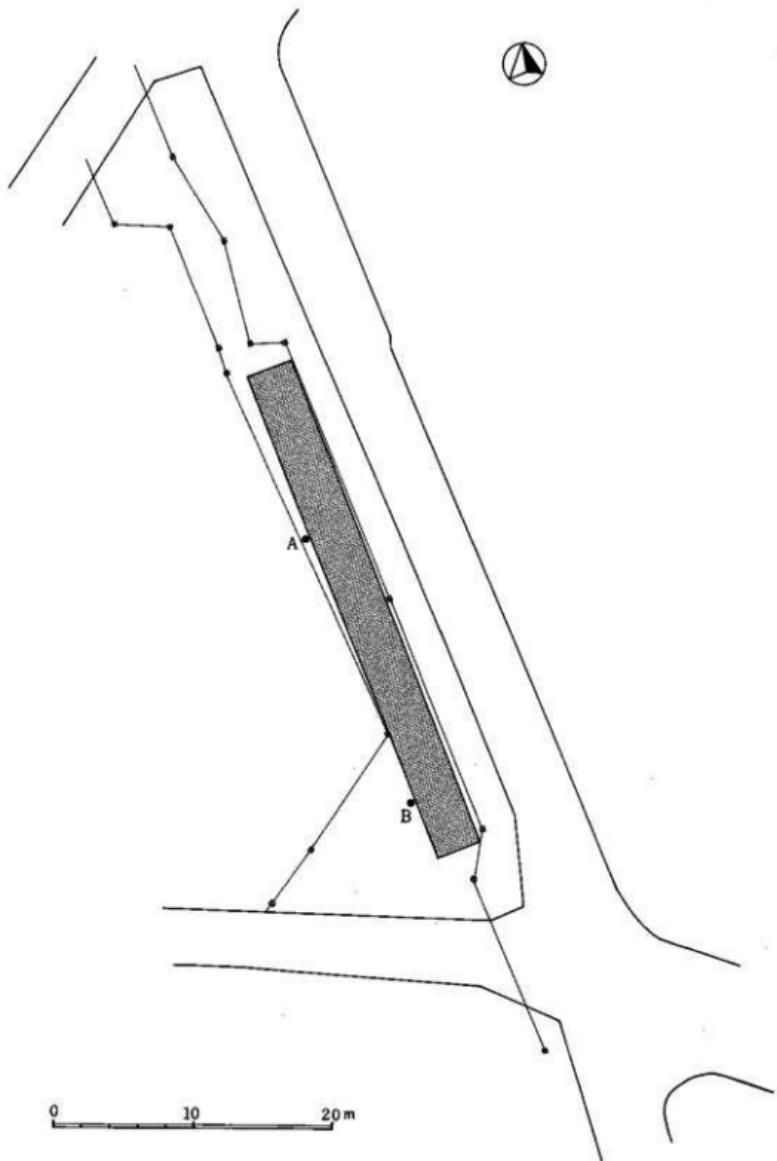
調査は層序の確認、遺物の出土状況や遺構の有無を探るため、長さ37m、幅3.4mの南北トレンチを1本設定し、バックホーを使って掘り下げた。トレンチ北側では厚さ50cmの表土(黒褐色壤土)の下に砂礫層、砂礫互層が続いている。また南側では黒褐色壤土と砂礫層の間に厚さ30cmのローム層の挟みがみられる。おそらく産状から2次堆積の産物と思われる。

前述したようにここは河川の影響を受ける複雑な堆積環境にあり、層序断面図からも大規模な氾濫や繰り返しの堆積などが読み取れる。これらの堆積過程により現在の地形は形成されており、生活を営む地ではないことを如実に表わしている。また流れ込みも含めて出土遺物は皆無であった。

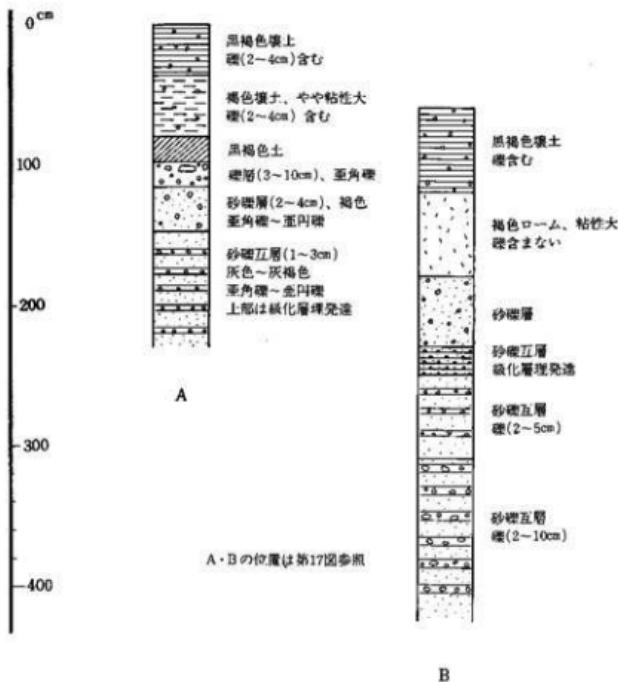
以上の結果を得て調査を終了した。

3 まとめ

本遺跡は立地条件のみからこれまで遺跡とされてきたが、過去に遺物の出土例はなく、また2度にわたる発掘調査においても遺構・遺物は認められなかった。調査結果からわかるようにここは極めて不安定な場所であり、遺跡の存在自体疑問視されよう。



第17図 千本原遺跡調査地区図



第18図 千本原遺跡層序断面図

第IV章 結 語

塩尻市広丘地区は、近時、中央道長野線、闇場整備等の開発事業に先立つ発掘調査の増加によって、年々、考古学的知見が蓄積されている。

先土器時代は、丘中学校遺跡からナイフ形石器、尖頭器を中心とした一括資料が得られ、和手遺跡からも1点ではあるが尖頭器の出土がある。縄文時代に入ると、吉田向井遺跡から有舌尖頭器が発見され、他に高出北ノ原でも比較的まとまった資料が得られている。

縄文時代全体を通じて、広丘地区は遺跡が稀薄で、断片的な資料が大半である。そうした中にあって、吉田向井遺跡の中期前半の墓内期に属する豪華な土器群を出した第1号住居址の存在は貴重である。また、遺跡が極端に少い奈良井川流域で、三角墳土製品を出した郷原横沢遺跡も注意される内容を有している。縄文時代晚期から弥生時代にかけては片丘君石遺跡、松本市小赤石行遺跡で多くの資料が得られており、立地的にやや山麓寄りに局しておらず、広丘地区からはほとんど姿を見ない。

弥生時代に入ると、吉田向井でも断片的な遺物は出土しているが、やはり方形周溝墓を出した丘中学校・北の原周辺に中心が求められよう。

古墳時代に入ると吉田向井を含めて丘中学校から南に延びる高出遺跡群に遺構が発見され、東方の松本市小赤白神場では集落址が調査されている。そして平安時代には、広丘全般にわたって大きな集落が展開する。吉田川西、吉田向井、丘中学校、和手、そして八稜鏡を出土した堅石遺跡などはその代表例であり、平安時代は近年の調査によって最も顕著な成果があげられたといえる。

そして、今まで余り取り上げられることができなかった中・近世にも最近になってようやく考古学的な光があたれつつある。吉田川西遺跡での輸入陶器を主体とする成果、吉田向井遺跡での住居、土壤そしてそれに付随する土器類は今後大いに活用されるべき資料である。

以上のように、吉田向井遺跡は、この地域の歴史を明らかにするためには欠くことのできない多くの貴重な資料を提供した。

以上述べてきたような成果が得られた吉田向井遺跡の調査は、長野県松本建設事務所、地元関係者そして発掘に携っていただいた多くの方々の御理解と御援助によってようやく成し遂げることができました。衷心より感謝申し上げます。



吉田向井遺跡発掘前全景（北側から）



表土除去作業（南側から）



第1号住居址



第1号住居址カマド



第2・3号住居址



第2号住居址出土状態

図版 4



第4号住居址



建物址



堅穴状遺構



土壤 1

図版 6



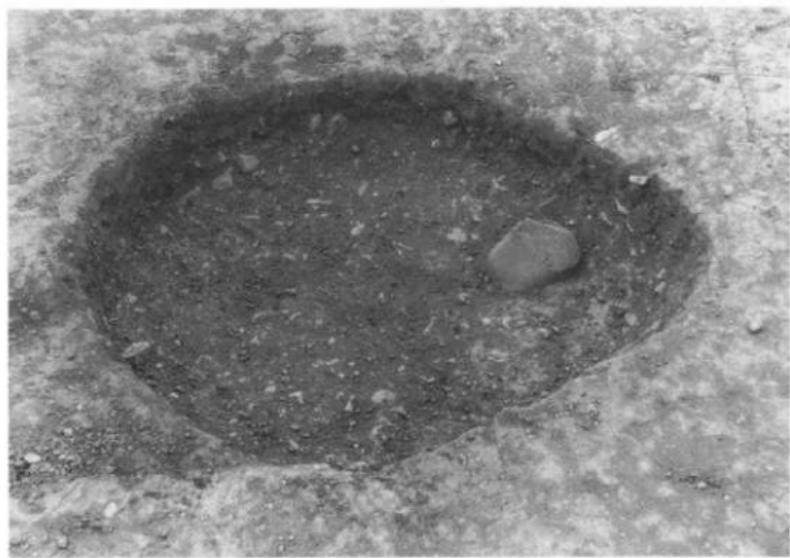
土壤3



土壤4



土壤 5



土壤 7

図版 8



土壤12



調査区全景（北側から）



発掘作業風景

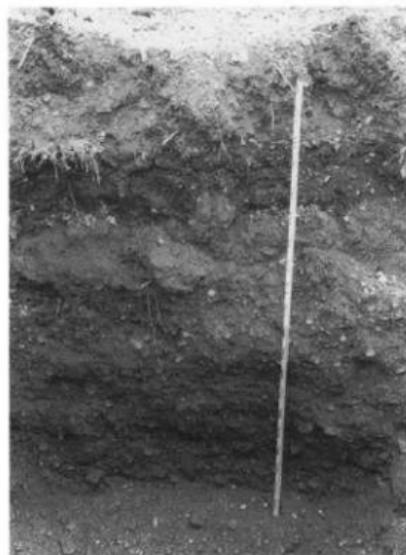


住居址実測風景

図版 10



千本原遺跡掘削作業



トレンチ壁セクション
(第18図参照)

吉田向井・千本原

—昭和63年度県単高速道関連道路改良工事
埋蔵文化財包藏地発掘調査報告書—

平成元年3月8日 印刷
平成元年3月10日 発行

発行 塩尻市教育委員会
印刷 電算印刷株式会社

